Big Five と YG 性格検査の関係性の探索

— Big Five 形容詞短縮版と YG のジョイント因子分析から —

○山本理恵¹・清水和秋²

(¹愛知県警察・²関西大学社会学部)

キーワード: Big Five、YG 性格検査、ジョイント因子分析

Exploring the relationships between Big Five and YG Personality Inventory:
Joint factor analysis for the adjective short list of five factors and the scales of YG

Rie YAMAMOTO¹ and Kazuaki SHIMIZU²

(¹Aichi Prefectural Police, ²Faculty of Sociology, Kansai University)

Key words: Big Five, YG Personality Inventory, joint factor analysis.

【目 的】

パーソナリティをより包括的に捉える検査として様々な尺度が提案されている。たとえば、NEO-PI-R (Revised NEO Personality Inventory; Costa & McCrae, 1992)や5因子性格検査(FFPQ研究会, 1998, 2002)はBig Fiveと呼ばれる5つの特性を、YG性格検査(矢田部ギルフォード性格検査; 辻岡, 1957, 2000; 矢田部, 1954)は抑うつ性(D)や社会的外向(S)などの12の特性を測定する質問紙法による代表的なパーソナリティ検査である。Big FiveとYGでは測定しようとする特性の種類や数は異なるが、YGには部分的にBig Fiveと関連するといえる尺度もある(たとえば、辻, 1998; 廣島, 2009)。本研究では、Big FiveとYGの尺度の関係性を探索することを目的とする。複数の検査間の関連性を検討する方法として、探索的なジョイント因子分析や構造方程式モデリング(Structural Equation Modeling: SEM)によるモデル化などが考えられる。

本研究では、Big FiveとYGをジョイントし、探索的因子分析によりBig FiveとYGの関連性を検討してみる。ここでは、Big Fiveの5因子がYGの12尺度よりもより上位にあると想定し、探索してやることにする。

【方 法】

調査対象者: 2006年~2009年の4年間で大学の授業(主に大学2回生を対象とした授業)において、大学生を対象として調査を実施した。調査に参加し、欠損のない回答者820名(男性277名、女性543名)を本研究の分析対象とした。平均年齢は19.7歳(SD=2.69)であった。なお、2006年と2007年の回答者は山本(2007)、山本・清水(2007)、山本(2008)における研究の調査対象に、2007年と2008年の回答者は山本・清水(2009)の研究の調査対象にも含まれている。

測定項目: Big Five(形容詞)短縮版2006(山本・清水, 2007; 山本, 2008)とYG性格検査(辻岡, 1957, 2000; 矢田部, 1954)を測定項目とした。Big Five(形容詞)短縮版の質問紙は「話し好きな」、「心配性な」のようにBig Fiveの5つの因子についてそれぞれ6個(計30個)の形容詞からなり、7件法(「非常によくあてはまる」~「まったくあてはまらない」)で回答するものである。YG性格検査は抑うつ性や社会的外向などの12尺度についてそれぞれ10項目からなり、「はい」「いいえ」「?(どちらでもない、わからない)」の3件法で回答するものである。

【分 析】

Big Fiveの探索的因子分析: Big Five(形容詞)短縮版の尺度から、5因子を取り出すため、探索的因子分析をおこなうこととした。Big Fiveの5因子ごとに3項目ずつを併せた小包(parcel: 3項目の得点の合計/3)を作成し、各因子2つ(a, b)の小包(計10個)を以降の分析に用いる変数とした。項目の組み合わせは山本・清水(2007)あるいは山本(2008)と同じである。スクリーングラフと仮説にもとづいて因子数を5とした。主因子法の繰り返しにより共通性を推定し、主因子解をVarimax法で直交回転し、さらにPromax法で斜交回転をおこない、Big Fiveの構成概念に対応する5因子が

得られた。なお、分析にはPASW Statistics 17.0を使用した。

Big FiveとYGのジョイント因子分析: Big Fiveの5因子とYGの12尺度の関連性を検討するため、Big Fiveの先に作成した小包と、YGの12尺度

Figure1 Big Five・YGのスクリープロット

【結 果 と 考 察】

Big FiveとYGのジョイント因子分析においても、Big Fiveに対応する5因子が得られた(Table1)。情動性(N)因子へはYGのD, C, I, N, O, Co尺度の因子パターンの値が高く(.479~.877)、外向性(E)因子へはYGのAg, G, R, A, S尺度の値が高かった(.464~.770)。YGのT尺度は情動性(N)因子(-.584)と誠実性(C)因子(-.454)の両因子との関連がみられた。このほかにCo, Ag, R尺度においても値はそれほど高くないがBig Fiveの複数の因子との関連がみられた。

Table1 Big Five(小包得点)とYG(尺度得点)のジョイント因子分析の因子パターンと因子間相関行列

尺度	情動性(N)	外向性(E)	開放性(O)	協調性(A)	誠実性(C)	共通性	平均値	標準偏差
BF_N_a	.799	-.055	.000	.130	.135	.627	5.236	1.407
BF_N_b	.762	-.015	-.049	.080	.144	.569	4.711	1.338
BF_E_a	-.038	.862	-.090	.101	.005	.756	4.681	1.246
BF_E_b	-.015	.896	-.108	.000	-.030	.743	4.165	1.349
BF_O_a	-.005	-.089	.874	.031	-.009	.706	4.185	1.229
BF_O_b	-.032	.027	.848	.143	-.193	.700	4.257	1.080
BF_A_a	.022	.084	.039	.807	.092	.722	4.515	.901
BF_A_b	.041	.009	.117	.838	.103	.750	4.598	.997
BF_C_a	.030	-.015	-.057	.094	.692	.496	3.902	1.192
BF_C_b	.047	.091	-.133	.096	.772	.623	4.390	1.231
YG_D	.774	-.074	.034	-.042	-.011	.647	12.972	5.860
YG_C	.774	.276	-.054	-.015	-.229	.667	11.320	5.149
YG_I	.704	-.167	-.178	.205	-.158	.756	11.078	5.602
YG_N	.877	-.018	-.077	-.043	.124	.794	12.093	5.324
YG_O	.671	.084	.172	-.018	-.102	.450	11.188	4.013
YG_Co	.479	.043	-.037	-.276	-.019	.352	9.233	4.362
YG_Ag	.310	.498	.202	-.208	-.040	.382	10.491	4.327
YG_G	-.215	.464	.094	-.009	.285	.528	10.165	4.942
YG_R	.139	.747	.013	.063	-.340	.581	11.906	4.813
YG_T	-.584	.120	-.182	.113	-.454	.515	8.332	4.767
YG_A	-.080	.685	.057	-.086	.253	.651	9.409	5.308
YG_S	-.038	.770	-.011	.098	.144	.706	11.688	5.676
情動性(N)	1.000							
外向性(E)	-.302	1.000						
開放性(O)	-.198	.383	1.000					
協調性(A)	-.183	.171	-.070	1.000				
誠実性(C)	-.196	.156	.232	.245	1.000			

注1) BF_N_a~BF_C_bは、それぞれBig Fiveの5因子名(N, E, O, A, C)と小包記号(a, b)を表わす。
YG_D~YG_Sは、それぞれYGの12尺度名(D, C, I, N, O, Co, Ag, G, R, T, A, S)を表わす。

D~N尺度はYGを因子レベルでみた場合、情緒不安定性因子、O~Agは社会的不適応因子、AgとGは活動性因子、GとRは衝動性因子、RとTは非内省性因子、AとSは主導性因子と分類されることから、Big Fiveの情動性(N)因子はYGの情緒不安定性因子や社会的不適応因子に含まれる尺度と、Big Fiveの外向性(E)因子はYGの活動性因子や衝動性因子、主導性因子の尺度と関連するといえる。これらの結果から、YGはBig Fiveのとくに情動性(N)と外向性(E)をより詳細に検討することのできる尺度といえる。